

はじめに

グローバル化が進む 21 世紀において、科学技術立国を目指す我が国では、人材不足が叫ばれる一方で、博士研究員（ポスドク）の就職難が社会的な問題となっている。とくにバイオ系ポスドクの就職は深刻である。なぜこのような一見矛盾する事態が起きているのであろうか。一昔前に比べると、大学院教育の重点化により、多くのポスドクが輩出されている事実がある。社会への受入れシステムが整備されていないことに加え、産学官がそれぞれに期待する優秀な人材像に若干のギャップがあることも確かであり、また、ポスドクのキャリアパスに対する本人、アカデミア、そして社会（企業）の認識の違いも大きく影響していると思う。

このような現状を踏まえ、生物工学会誌では、2008 年 2 月から「キャリアパス 生物工学研究者の進む道」の連載を開始した。本連載は、生物工学分野のポスドクだけでなく、学生を含む若手研究者を対象に、当該分野で活躍されている先輩諸氏がどのように考えて自身のキャリアパスを切り拓いてきたか、その生き様を語ってもらうことで、多様なキャリアパスの現状を知ってもらい、また、自分自身の将来を展望する契機となり、さらにはお互いの議論の深まりを期待して生物工学会誌編集委員会で企画したものである。

企画趣旨に賛同していただいた多くの方々から、実にさまざまな内容の原稿をいただいた。この 1 年半で 70 件となり、企画をした編集委員会にとってはありがたい限りである。執筆者の方々には、ご自身のこれまでの経緯を振り返り、それぞれの立場で常日頃感じておられることやご意見を、悩める若き研究者に対するエールという形で自由に書いていただいた。

この度、本会執行部の了解を得て、掲載した貴重な原稿をまとめて冊子とした。1 冊にすることで、またいろいろな活用の仕方もあると期待している。生物工学の将来を担う若手研究者の参考になれば幸いである。

ご多忙の中、執筆依頼を快諾していただき、若者に対し熱く語っていただいた先生方には厚くお礼を申し上げます。

2009 年 9 月

『生物工学会誌』編集委員会